

「来春やっと借金を払い終わります。ひとり3000万円でしたから大変でした」

昨年末、黒崎兄弟の取材で伺ったときのこと。

武生鍛冶の大御所のひとり佐治武士さんが笑顔で語る話を伺って、思わず立ち上がってしまった。

今や地域活性化の成功事例として、各自治体から注目を集める「タケフナイフビレッジ」。

それを作り上げた越前打刃物10人の親方衆は、各3000万円を共同出資したというのだ。

立ち上げには、なんらかの補助金などを活用したとばかり思っていたけれど、

もの凄く衝撃的なお話しだった。

伝統刃物の未来を見据え、歩んできた親方衆10人の試行錯誤の軌跡「武生鍛冶十賢者の物語」。

2013年春、改めて福井県武生を訪ね、その道程を彼ら自身に語ってもらった。

タケフナイフビレッジ 20年の軌跡

武生鍛冶十賢者物語

Sage 10 Masters who have built TAKEFU Knife Village

●文・写真:長谷川明之
Text & Photos TOMO HASEGAWA



穏やかな笑顔を見せる十賢者。将来を見据え、渡ぎを削ってこられた親方衆だからこそ、慈愛に満ちた表情。左から:加茂詞朗(加茂藤刃物)、浅井正美(浅井打刃物製作所)、戸谷(とたに)治二(戸谷刃研)、岡田政信(岡田打刃物製作所)、佐治武士(佐治打刃物製作所)、安立(あんりゅう)勝重(安立刃物製作所)、加藤弘(カネ弘打刃物製作所)、本多一義(本多刃物)、北岡英雄(北岡刃物製作所)、そして当日出張でお会いできなかったが、加茂勝康(加茂刃物製作所)の各氏。



「我々もお客さんから見られることによりやく慣れました」観客は異口同音に語る。

「我々でしか作れない物を作っていくしかない」。だからこそ製作の現場が見学できる環境を作りたかったという。

Sage 10 Masters who have built TAKEFU Knife Village

スロープをあがるとまず刃物の種類や歴史、製作方法を学べる。

「我々でしか作れない物を作っていくしかない」。だからこそ製作の現場が見学できる環境を作りたかったという。その6年後「越前打刃物」が伝統工芸品に指定され、80年には彼らの統一ブランドの名称が「タケフナイフビレッジ」に定まった。物語の舞台は整った。

デザインディレクター 川崎和男氏との出会い

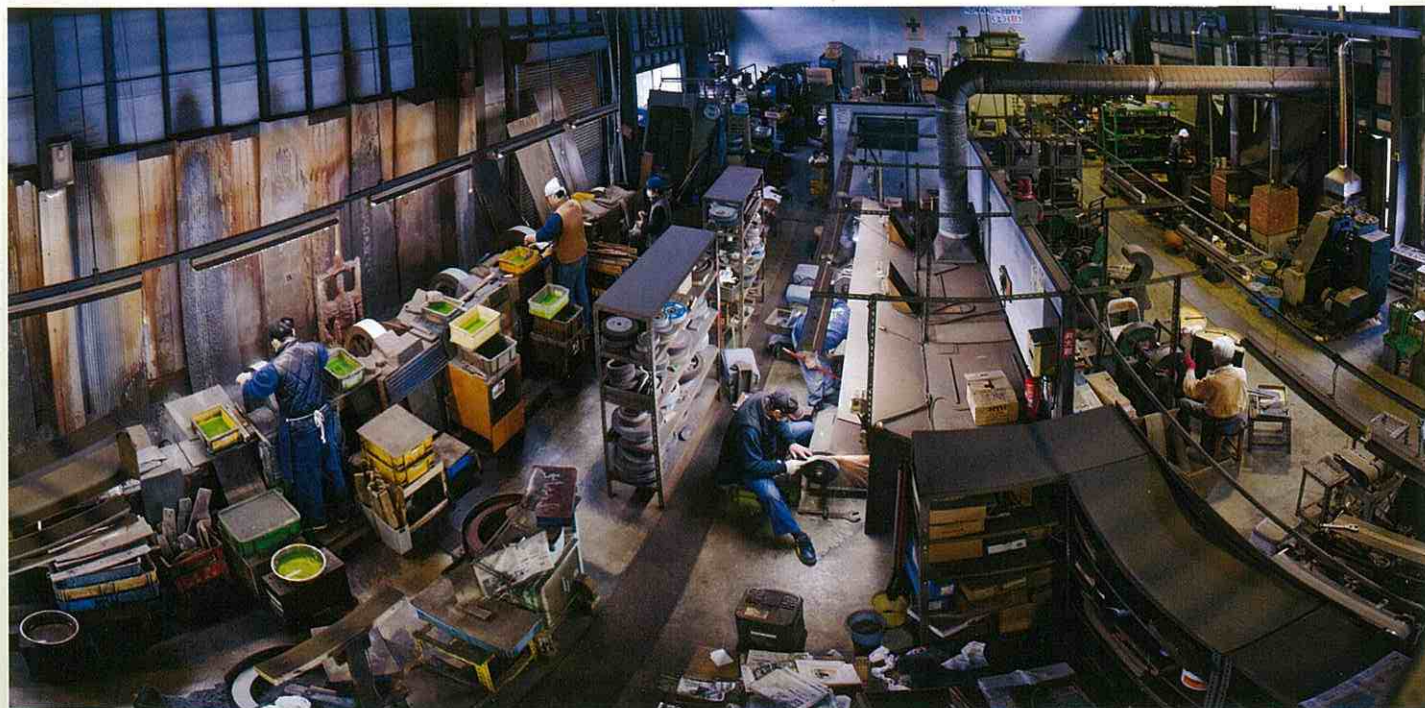
「今までの鍛造包丁を作っているだけでもダメになる。作家になれ！」

デザインディレクター川崎和男氏のひとことが、タケフナイフビレッジの大きなターニングポイントとなった。

川崎氏は、ブランドが決定し、オリジナル製品を作ろうとなり、工業試験場から紹介された人物。才気あふれる言葉で皆を鼓舞した川崎氏が提案した新たな包丁。その斬新なデザインに鍛冶職人たちは、皆驚いた。従来の刃と柄を整えられたものとはまるで違っていた。刃物の形そのものを変える。越前打刃物の伝統を踏襲するだけでなく、時代に合わせ大きな変化を受け入れることも不可欠であることを実物をもって知った。

現在もタケフナイフビレッジでは包丁を中心に製作されているが、この時の意識改革が根底にしっかり根付いているという。

しかし、斬新なデザインゆえに製作は困難を極めた。仕事が終わってからメンバーが集まっては試作と打ち合わせ。「このデザインがいい」と意見を曲げない川崎氏と衝突を繰り返した。ただ「武生打刃物の伝統を伝承する」という共通の目的はぶれなかったからこそその衝突。自分たち



工場には多数のベルトハンマーに熱処理マシン、水研機など仕上げ用の各種マシンが並ぶ。製作力と表現力を向上させられる活動拠点として、情報発信の場として大きな成功を収めた。



鍛冶の活動拠点として、見学を含めPRの舞台として、中身のあるオブジェとして、今や越前打刃物の象徴的存在。武生ナイフビレッジ。毛織物設計。火と鉄と水の色がモチーフ。独特の外観が魅力だ。1993年4月竣工。

越前打刃物の危機

「越前打刃物の伝統を消したくはなかった」

タケフナイフビレッジを立ち上げた10人の親方は皆そう言っていて当時を振り返る。

越前打刃物はおよそ700年にわたり高い技術を伝承し続けてきた。1979年には伝統工芸品としての指定も受けている。その伝統を守るうと考えた彼らの知恵と努力が「タケフナイフビレッジ」というものに結実したのだ……。

70年代。日本は戦後最大の好景気「バブル」に向け、華やいていた。その片隅で、越前打刃物の将来に不安を抱く鍛冶職人達がいいた。

「それまでは工場でトントンやっていればメシが喰えた……」

時代の変化から商店街の刃物屋さんが刃物が売れなくなり、金物屋さんも激減。代わりにホームセンターが刃物を扱うようになっていた。同時に安価な海外刃物製品が流入。日本伝統の打刃物は過酷な価格競争にさらされていた。

当時、鍛冶屋さんは町の中で10坪くらいの規模でやっているのが普通だった。激化する価格競争についていくためには数をこなすしかない。ただでさえ過酷な鍛冶の仕事環境。将来性のない職場に、後継者を呼び込めるような状況ではなかった。

最大の問題は騒音だった。鍛冶屋町という鍛冶屋さんが多く住む地域ですら「ベルトハンマーの振動で鍋

が跳ねて料理できない！」騒音で電話が聞こえづらいなど、新住人の増加とともに苦情が増加した。結果、工場の移転を余儀なくされるという状況が増えていた。

「このままでは越前打刃物が途絶えてしまう……」

将来を憂慮する人々が集まり、武生刃物工業研究会「フューチャー」が結成された。タケフナイフビレッジの前身となる勉強会だった。地元武生にあった工業試験場を拠点に、夜ごと集まっては将来のためになすべき事は何か、と意見を出し合ったと



武生ナイフビレッジメインホール。ショップから工場までを包括する特別な空間を演出。中央のスロープを歩くだけで、刃物の種類や歴史、製作手順を学びつつ、ナマの製作現場見学へと誘われる。車いすで上れるスロープ角度もデザイナーである川崎氏ご自身が車いす使用者だからだ。十賢者曰く「川崎和男くしてこれはなしえなかった」そのである。



(左上) 販売コーナーを兼ねたメインホール。当時まだ珍しかったバリアフリー化を実現していた。



(左中) 訪れたお客さんは、鍛冶職人たちから説明を受けられるチャンスがある。

(左下) 子供達が日本の伝統工芸である「刃物」に触れられる、貴重なきっかけを育む大切な活動拠点。



地元のお寿司屋さんが使って、研ぎ減ったアルタスシリーズ。最後まで切れ味を保持する。



ARTUS PROFESSIONAL

柳刃(右):全長410mm、ブレイド長290mm、鋼材V金5号。
出刃(左):全長282mm、ブレイド160mm、鋼材V金5号。

デザインプロデューサーのデザインを、皆で製品化したタケフナイフビレッジの代表モデル。越前打刃物ならではの伝統技術による性能を、現代の生活に融合させる。デザイン包丁というカテゴリーを提案&定着させた逸品。



未来に向けやるべきことを話し合った。デザインディレクターの川崎氏(中央)。10人の親方も当時は越前鍛冶の若手だった。



川崎和男氏が描いたデザインイラストがナイフビレッジ内に展示されている。



タケフナイフビレッジ建設当時の写真。できることは力を合わせ、限られた予算を補った。

「特長を見つめ直すきっかけもなかった。単純に形だけならプレス成型でできてしまう。だが、鍛接と火造りで作ってこそ伝統の打刃物産地『武生』らしい作品にできる。鍛造刃物ならではの良さを活かしてこそ、プレス製品に負けない成果が出る! そんな思いで互いを見れば、包丁を得意とする人がいれば、鉈や鎌、鋏が得意な人もいた。皆の持ち味を融合し、試行錯誤を繰り返しながら、コンセプトに添った作品へとたどりついた時は数年が経っていた。

最初の一步こそ時間がかかったが、クリアすることで思考パターンができた。そこからは歩みも軽やかになった。83年には17点のオリジナル商品が揃い、東京八木木のギャラリで『タケフナイフビレッジ展』を開催した。大好評を得た勢いで各地の展示会を敢行。86年にはニューヨークでの展示会も大成功させた。

「試行錯誤できる仲間がいたから実現できたこと。2、3人ではできなかった」

と十賢者は回想する。彼らのみではなく、例えば夜中までつきあってくれた工業試験場の職員など周りの環境にも助けられたという。

この頃の体験が基となり、他に類を見ない企画へと発展していくのだった。

新たな活動拠点の建設

ブランドは軌道に乗ったが、前述したように時代の流れもあり、「町中の仕事場」でのものは、次第に限界を迎え始めていた。



川崎氏とタケフナイフビレッジが作ったオリジナル作品のコーナー。

「町中のはだか電球の下には若手は来ません」

越前打刃物の将来を見ずして行ってきた経験と「思い」が重なり、自然に強靱な相互協力が得られる拠点を作ろうという機運が高まった。そして現在の施設である『タケフナイフビレッジ』が企画されたのだった。川崎氏とコンセプトを煮詰め、92年に当時人気の建築家毛網毅(もづなきこう)氏に設計を依頼した。総工費は3億円。当てるにできる補助金などは全くなかった。

この時、親方衆が下した決断が凄かった。

「建設資金はメンバーで自己負担しよう」

莫大な借金を背負うことになる。リスクは高い。当初20人以上いたメンバーが、気がつけば10人だけになっていた。

結果論だが、このとき10人になったことが功を奏した。解決策などへのアイデアが見出せて、それでいて意見をまとめやすい。また、借金の負担も現実的に分担しやすい効果

夢の実現

タケフナイフビレッジを建設するにあたり、10人が掲げた目標は以下のとおり。

- 越前鍛冶の核拠点となる工房の設立。
- 工場見学と研修(体験)を含めた打刃物のPR。
- 伝統を継承する若手、後継者の育成。

作業を見ながら、売店で作品を買ってもらえる。赤めた鉄を打つ姿、音も含め、見れば価値がよく判るもの。このスタイルは全国でも武生しかない。タケフナイフビレッジを活動の拠点に、メンバーがより強靱な相互協力と理解を得られ、越前打刃物産地活性化の核となる。いかに伝統を継承していくか? 産地内部へ、産地から世界への情報発信基地として機能することを折り込んだ計画だった。

93年4月の竣工当時はバブル経済が弾けた直後だ。日本経済すべてが落ち込み刃物もナイフも売れなくな



年2回のナイフ教室以外に、1日の包丁コースがある。これが結婚式のサプライズとして、花婿さん達に人気。取材当日も2組の新郎がチャレンジしていた。



昨年、新たにチャレンジ工房が新設された。ナイフビレッジは今も成長&拡大している。



親方10人衆の想いを継承するタケフナイフビレッジの若手鍛冶。皆明朗で快活。



(右から)
「6寸生垣鋏」
「本職7寸刈込鋏」
「5寸止め付刈込鋏」

とくに廻し鋼付けによる刈込鋏の製造は、越前打刃物や原産地にも例がなく、唯一の伝承者であり、プロ用の刃物造りが自在に行えるただひとりの職人。



(上から)
「ナマソリ」:全長202mm。
「切り出し」:全長202mm。
「竹ひご割り」:全長190mm。



岡田打刃物製作所
岡田 正信

父である二代目紋治郎(現代の名工受賞)に付き、打刃物業に就業。越前刃物の伝統技法である証置法(廻し鋼付け)による鋼の沸かし付けの技法の伝承者。昭和60年三代目紋治郎を襲名。現在に至る。

舞小槌の技術を修得し火造鍛造による、造林用の鎌、鉋や刈込鋏を中心に、ヤリカンナ、うるしかき、ナマソリ、切出ナイフ、彫刻用刃物、特殊包丁などの特殊刃物を製造する。



浅井打刃物製作所
浅井 正美

「銀河No.4」:全長160mm、ブレイド長70mm、鋼材コアレス鋼(V金10号&V金2号積層鋼76層)、ハンドル材アイアンウッド。参考品。
「銀河No.3」:全長270mm、ブレイド長150mm、鋼材粉末ゴールド&ニッケル311層(R2)、ハンドル材アイアンウッド。

中学卒業から鍛冶の世界に飛び込んだ浅井打刃物5代目。専門は包丁だが、平成元年からカスタムナイフ作品を数多く手がけ、JKGショー、堺、関で開催されるナイフショーに毎年出展。培った感性と技術を包丁にフィードバックしている。



北岡刃物製作所
北岡 英雄

「出刃包丁墨流し」(上):全長311mm、ブレイド長183mm、鋼材V金多層鋼、ハンドル材ウッド。
「柳刃包丁墨流し」(下):全長311mm、ブレイド長213mm、鋼材白紙多層鋼、ハンドル材ウッド。

おもに出刃、和包丁を手がける越前打刃物づくり三代目。真っ赤に熱した鉄の塊をハンマーで叩いて製作するのは面白く、本当に楽しいそうだ。片刃の刃物の切れ味と強さは秀逸。



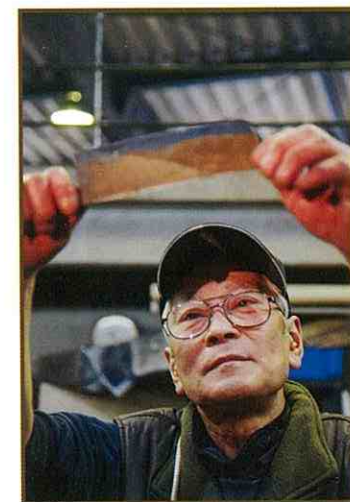
Sage 10 Masters who have built TAKEFU Knife Village

しかし、タケフナイフビレッジという船はこぎ出た。やるしかない。職人であっても営業をした。すべてのイベントにこまめに参加した。効果は少しずつ出てきた。旅行会社に話を持って行くことで、バスツアーが立ち寄るようになった。実演販売のスタイルが人気だったのでより効果的に見せるよう努力を重ねた。作るだけにとまらなかつた。職人自身が営業に行き、ナイフのショーに出た。作り手自らが現場に行くことで「外国人はタマスカス好む」「多層鋼を作った方が良い」などの知識やアイデアが出た。さらに、使い手の質問に直接丁寧に答えることで、新しい注文が入るようになった。そして今、観光バスが毎日何台も立ち寄り、年間約2万人の観光客がナイフビレッジを訪れる。さらにナイフ教室が年に2回開催され、いつも定員がすぐに満杯になる。ナイフ教室以外に一日包丁体験コースがあり、昨年は約230人が参加した。結婚式のサプライズに新郎から新婦へ「美味しい料理を作ってください」というメッセージを込めたプレゼントとして人気だ。ナイフビレッジでは営業をかけておらず、「動画サイトのユーチューブを見て来た」という人がほぼ毎日訪ねてくる。販路を極めた状況は、町おこしの貴重な成功例として広く知られるまでになった。

自らのため、そして鍛冶産地としての未来を見据え、鍛冶するために、前に進むはかばかだったのだ。

すべてはタケフナイフビレッジという施設があったからできた。「ナイフビレッジを立ち上げなかつた。おんぶに抱っここの職人では始まらない。目的遂行のために。独立心ある10人の鍛冶職人主導だったことが功を奏したのだ。」

「借金返済が終わったから」といって、とつとつに廃業していた。メンバーがまとまっていく最大の難。それが借金だった。お金が貯まってきたから何かやるうちはスタートが遅くなる。結局何も実現しない。まして補助金を当てていては絶対に実現しない。だからリスクを負った。だが、その借金で大打撃を受ける可能性はなかったわけだ。ご家族を説得するも大変だったと思う。「借金返済が終わったから」といって、とつとつに廃業していた。今でこそ十賢者の皆さんは笑顔で語る。完済できた今だから終わってしまった。いまは呆気なくも思えるのだろうか。その道程はまさに「壮絶」だった。現在福井県には刃物以外に越前和紙、若狭塗、若狭瑠璃、越前焼など伝統産業が多くある。その中で補助金をもらっていないのはタケフナイフビレッジだけだ。行政主導で行われる伝統文化復興の多くが失敗している現状の中、研究会、勉強会を重ねて、職人主導だったことがタケフナイフナイフビレッジの成功の秘訣だろう。



戸谷刃研
戸谷 治二

長両刃包丁の刃付けをはじめ、両刃、片刃、大工道具、各種ハサミ、ナイフ、畳み専用の機械刃など、各種刃物の研ぎ直しや刃付けに長ける。仕事だけでなくスキー、硬式テニス、山登りなどを楽しむスポーツマンでもある。



安立刃物製作所
安立 勝重

(右より)
「菜切黒打」:全長307mm、ブレイド長180mm。
「三徳黒打」:全長315mm、ブレイド長180mm。
「三徳磨き墨流し」:全長330mm、ブレイド長197mm、鋼材白紙多層鋼、ハンドル材。
「三徳磨き墨流し」:全長307mm、ブレイド長170mm、鋼材V金10号多層鋼、ハンドル材。

明治創業の刃物製作所の4代目として、各種鍛造包丁やステンレス鍛造包丁を得意とする。登山家としてヨーロッパアルプス、アイガー、マッターホルン、モンブランへの登頂経験を持つ。多彩な鍛冶職人。





「菜切包丁磨き」(中): 全長295mm、ブレイド長170mm、鋼材V金10号3枚。
「三徳包丁磨き」(下): 全長345mm、ブレイド長210mm、鋼材V金10号多層鋼。

上は今回の取材に参加できなかった加茂刃物製作所の加茂勝康さんが手がける野菜収穫包丁。加茂詞朗さんの従兄弟。用途に合わせた自在な加工を得意とする。

「月にウサギ」

多層鋼で眺められたカスタムそば切り包丁。一尺一寸という大型刃物を端正に製作する技術が見事。多層鋼ならではの模様を薄雲に見立て、ニッケル鍍金で月を表現。



加茂藤刃物
加茂 詞朗

菜切包丁や三徳包丁、さらにそば包丁を得意にする。その他、用途に合わせた打刃物を手がける。タケフナイフビレッジ現理事長。

「若手の育成」はタケフナイフビレッジの目標のひとつだった。だから、若者を受け入れるにあたり「独立するまで面倒を見る」ということを当初から織り込んでいた。タケフナイフビレッジの仕事を工房として使う土壌があったからだ。

削り専門、磨き専門という助手的な仕事だけでは、将来の見通しがなかりにくい。しかし、ここでは火造り、鍛接、熱処理、仕上げ、研ぎ、鍛造刃物の知識と技術が学べる。だから独立が可能なのだ。

日本国内外でのナイフショーや展示会への参加ができる機会もある。4人で海外の展示会へ参加するなら、参加メンバーの内2人は若手を連れて行くという。お客さんと同じに接することで、ユーザーの要望や求められる性能やデザインなどが実現

持てる力で支え合う。日本の地盤を支えてきた底力。これがタケフナイフビレッジの凄さではないだろうか。

地域活性化にむけて数多くの試みがなされる中、これまでの成功事例は、全国でも珍しい。実際に各地の自治体や組合の視察も多い。そんなタケフナイフビレッジの偉業を讃え、行政から「あなたに叙勲を…」などという話もあるという。だが、10人の親方は誰ひとりとしてそんなことに関心はないようだ。ただ、ひた向きに歩んできた彼らからは、壮絶な物語があるがままに語り、ここまで来たことへの安堵と感謝、そして責任感が異口同音に語られるばかりだ。

最後はそんな十賢者の言葉をお借りして、今回のレポートを締めくくりたい。

「夢ってのは、描き続けると叶うもの。その気になると相續できるもの。技術とともにそれも教えていきたい。次の者に繋いで、初めて、ほかのの仕事が終わるわけですから。」



タケフナイフビレッジ協同組合
福井県越前市余川町22-91
商品価格等問い合わせ: TEL0778-27-7120 / FAX0778-27-7100
E-mail tkv@dream.ocn.ne.jp / URL takefu-knifevillage.jp

現在、武生ナイフビレッジには12人の若手が働いている。皆快活で、楽しそうに働いているのが印象的だ。

当初は10人の親方衆だけで、若手はいなかった。最初に若手が入門したのは数年経過後の頃。それから徐々に増えていったそうだ。

彼らの特徴はなんといっても「刃物好き」ということ。

毎日の仕事が終わった夜や週末にタケフナイフビレッジにやって来ては、自らの研究や作品作りに没頭する。自発的に勉強しやってくるから、皆グングン伸びる。とにかく若者衆は表情が明るい。

実際に、若手のひとり山本直さんが4月に独立した。福井県も越前市も補助金を用意するため、空いている工房を修理し、機械を購入することができた。健全な運営ができていくから、第二世代が張り切る土壌ができていくのだ。

若手がナイフビレッジの門を叩くと、親方衆の間で空きがあるか相談し、条件の合うところに入門する。就職先は定まっているが、タケフナイフビレッジでは他の親方衆が皆仕事している環境だ。工程は同じでも、やっている内容は親方によって違う。だから同じ仕事でも別角度からアドバイスを授かることもできる。

「夢ってのは、描き続けると叶うもの。その気になると相續できるもの。技術とともにそれも教えていきたい。次の者に繋いで、初めて、ほかのの仕事が終わるわけですから。」

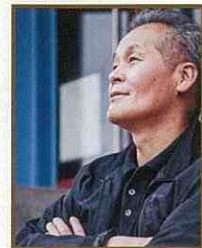


本多刃物
本多 一義

両刃の包丁にはじまり、そば切り、寿司切り、中華包丁、牛刀などの大型刃物でも精度の高い刃付けや、研磨仕上げを得意とする。

佐治打刃物製作所
佐治 武士

3代90年にわたり刃物製作を手がける。3代当主。30年以上にわたる打刃物の経験から、鍛造鋼を用途によって使い分け、ハマグリ刃で仕上げたナイフを得意としている。山林用鉈から各種カスタムナイフ作品まで、抜群に多彩な表現力が魅力。

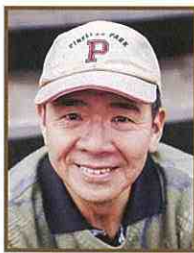


カネ弘打刃物の「金太郎」銘の包丁作品。
「三徳包丁」全長320mm、ブレイド長185mm。
「菜切包丁」全長310mm、180mm。
「鋼材利器材三枚鍛造」



「錬鉄鍛造肥後守ナイフ」
ブレイド83mm、ハンドル110mm。参考品。
鍛造により美しい模様を見せる錬鉄をベースに、鋼を割り込み本鍛造で仕上げた逸品。得意とする沸かし付け(鍛接)を活かした魅力の逸品。

Sage 10 Masters who have built TAKEFU Knife Village



カネ弘打刃物製作所
加藤 弘

おもに和包丁、ステンレス包丁など、昔ながらの火造り鍛造を得意とする。

(右より)
「芝草取型」刃長105mm。
「草取型」刃長110mm。
「松文型」刃長170mm。
「アスパラ型」刃長110mm。

カネ弘打刃物製作所が得意としているのが、職人の手作業による目立ての鍛錬だ。より強靱で切れ味のある鍛錬になるのだ。

